

生長の家 神の国 寮だより

光の泉

the spring of light

第 2 号

24年度 冬号

公益財団法人 生長の家社会事業団
 児童養護施設 生長の家神の国寮
 〒186-0003
 東京都国立市富士見台2-39-1
 tel 042-572-8770
 fax 042-573-9205
 http://www.kamino92.or.jp/

「子供達に生かされて」
 寮長 松下 昭

平成25年、新しい年が始まりました。年齢を重ねる毎に“光陰矢の如し”が身につまされ、時の過ぎ行くスピードが年々早くなるような気がします。老いにより認識力・思考力・判断力・行動力などが衰えてきている証拠かも知れません。

昨年、本寮舎を建替えさせていただき、施設の小規模化というインフラ整備の大きな課題を乗り越えることができました。今年、原点に立ち返って総てを見直し運営体制などを充実させる新たな出発点の年と致したいと思えます。

振り返りますと、平成12年、私が神の国寮の運営業務に専念するのを見計らったように、翌年早々理不尽な裁判を起こされ、寮内の動揺を治めることと裁判対策のため寮長室に泊まり込んで諸課題に全力で対応してきました。厳しい状況の中で、児童の存在が心の支えでし

た。専門知識も無い中で、一生懸命子供達の話聞き行動を共にしながら挫けないで前へ進む勇気ももらいました。寮長室の扉はいつも開放していましたが、児童は、不満・愚痴・要望・自分の過去など、何でも言ってきました。改善できるものは、直ぐに改善し、閉鎖的な環境と抑圧的な運営を少しずつ改めていく中で、私自身も児童養護の何たるかを学ぶこともできて成長させていたことができたように思います。

乳児院から入所してきた中学2年生のTSくんは野球少年で快活でリーダーシップある児童で目立つ存在でした。父親はいるのですが事故で記憶喪失してしまい、

◀ もちつき大会



リハビリのため入院している病院に尋ねていっても誰だか判然としない状態でしたが、何度も面会に行く様子に接して、TSくんが心の底から父親を求め父親と生活できること

に一縷の望みを持つていることに気付き言い知れぬ不憫さを感じ、其々の児童の抱えている問題の一端を垣間見た思いでした。

裁判が進むにつれて、原告の中心的主張が悉く事実誤認であることが判明して、裁判所は和解を勧告し、平成16年の暮れに和解が成立し裁判は終了しました。

裁判の対応と次々と辞めていくベテラン職員・新人職員の補充と教育、施設内の混乱・動揺の対応など、スト

レスと泊まり込みの激務で身体を酷使したためか、裁判の終了でホッとして気が緩んだ結果でしょうか、大腸癌を発症し、一月半の入院を余儀なくされました。入

院に際して、幹部職員に「児童・職員・関係者にご心配を掛けるのは申し訳ないので、入院したことを出来るだけ知らせないように！」とお願いしておきました。

入院して、3週間ほど経過した頃に、当時の処遇主任が見舞いに来て「昨日の児童会で、TSくんが手を上げて“最近、寮長の姿が見えないが何があつたのか教えてくれ！寮長は俺たちにとって、親代わりなんだから、子供として本当のことを知りたい！病気ならどんな状態なのか詳しく知りたい！”と半べそをかけた抗議のような口調で質問し、他の児童も同様な雰囲気だったので、寮長の状態を教えてくださいました。」と報告してきました。その話を聞いた時、今までの私の児童とのかかわる姿勢が根本的に間違っていたことを覚りました。児童は、こんな私でも親代わりとして、色々な思いで心の支えとし頼り、認めてくれていたんだと感じました。その様な児童の心情を一つも理解しないで、今迄ただ可哀想な境遇の子供達だから助けてやろう、面倒を見てやろう、と思いが上った姿勢でかわっていたのではないかと気がつかされました。本当の親を思うような児童の心情に触れ、涙が溢れて溢れて止まりませんでした。子供達よ！もうしわけなかった！すまなかった！と泣いて泣いて泣いて泣き明かしました。私は、子供達から、頼られ、慕われ、子供達に生かされていたんだ。本当の親にはなれないけれど、心と魂は親としてこの子供達と共に生き、共に生長させていたかどうか、自分自身に強く誓ったことでした。



当施設を退所した児童が集う会「飛翔会」(OB・OG会)が発

足しました。大学・専門学校に通うもの、社会の荒波に揉まれながらも一生懸命仕事を続けているもの、母親として育児と仕事を立派にこなしているもの、昔の入所中の「児童」の面影は無く、今はそれぞれ「大人」としての生活を営んでいます。

今年度は7月28日・10月20日にアフターケアセンター「ふるさと」を会場として、退寮者たちが交流する時間を設けました。施設生活における思い出話などを、楽しく会食しながら話すことが出来ました。児童の自立支援に努力してきた職員にとっては仕事冥利に尽きるとても良い時間となりました。今後は退寮者同士のネットワーク形成の場としても拡がりをみせてくれることを期待しています。

10月20日(土) 『卒業生と触れあう会』

日頃から在寮児並びに退寮者に関わりを持つてくださっているNPO法人ブリッジ・フォー・スマイルの職員さん、ボランティアさんの方々にもご協力を仰ぎ、職業適性を図るグループワークをしたり、別の退寮者3名も加わり、一緒におやつを食べたりとプログラムは進んでいきました。

最後に「飛翔会」会長のまいさん、副会長のしょうへいくん、まさあきくんの3名の退寮者に、退寮後の進学・就労の



苦労話などを在寮児童30名に話してもらう時間です。3人はそれぞれ、自身の境遇も含めて子どもたちに語りかけました。職員はしっかりと口調で生い立ちも含めて話をする3人に驚き、子どもたちは興味深そうに話を聞いています。「大学に行くにはどうしたらいいですか?」「どのくらい勉強しましたか?」などの質問も飛び交い、子どもたちの自立心を養う場として素晴らしい会となりました。

東京都は今年度「自立支援強化事業」を実施し、都内37の児童養護施設に自立支援コーディネーターを配置しています。

在寮児の自立に向けての取り組み強化と、退所後児童の相談・援助のマネジメントをするのが主たる役割です。

今後多くの方のお力をお借りしながらこのような機会を多くもち、18歳の退所以降も子どもたちと長く付き合っていける環境づくりに努めていきたいと思っています。【自立支援コーディネーター 須江宏行】



また会いましょう!



毎年本施設のクリスマス会は、日頃からお世話になっている市議会議員の石塚会長をはじめ、民生委員、児童委員、ボランティアさん、幼稚園・学校の先生方、横田基地の皆様をお招きし、日頃の感謝も込め、福祉会館の大ホールを貸し切り、大々的に行っています。



今年度は12月8日に開催し、子どもたちも一緒になって会場準備や料理作りを手伝ってくれ、職員も含め、皆がクリスマス会が始まるのを今か今かと待ち遠しい様子でした。石塚会長の乾杯から始まり、神の国寮の子ども達による、幼児さんのゴースターズのダンスや中高生男児のダンスパフォーマンス、職員による少女時代のダンスで、一気に会場は沸き、毎年恒例の『横田基地VS神の国寮職員』



平成25年1月の腕相撲では、自然と会場から掛け声が出てきて、この日一番の盛り上がりとなりました。

最後は皆のお待ちかねのサンタクロースからのプレゼント贈呈で、子ども達からは笑顔がこぼれていました。【FSW阿部綾子】



冬行事③
もちつき大会
12月18日
に餅つき大会が行われ
ました。実は、新寮舎
建て替えの

光の泉
工事の影響により神の国寮で餅つきが行われるのは3年ぶりなのです。子ども達も職員も、久しぶりのつきたてのお餅を食べるために、また、お正月のお雑煮のために、一週間以上から子ども達と共に準備をしました。

当日は凜とした寒さと、澄み渡る青空、風はほとんどない最高の餅つき日和に恵まれました。普段は本園からはなれて暮らしている、グループホームの子ども達も全員集合し、杵を振り下ろし楽しく餅つきを行うことができました。もちろんつきたてのお餅は、当日のお昼に、あんな餅やきな粉餅などにして頂きました。

第2号
将人】
※写真は巻頭



冬行事④
創業者感謝の集い



生長の家神の国寮設立者の谷口雅春先生のご生誕日は11月22日です。当施設では毎年11月23日の勤労感謝の日に、創業者感謝の集いを行っています。昨年6月に新寮舎が竣工し、家庭的養護養育環境が整えられましたが、一方で施設の小規模化が進んだため、施設全体の一体感の醸成が一つの課題となっています。この行事は毎年、全職員・全児童が参加して、創立者の御遺徳を学び、感謝のお墓参りを行っています。今回は、國弘昭義副施設長の指導のもと、谷口雅春先生が若者向けに書いて下さった詩について学び、全員で志を新たにしました。以下にご紹介致します。【処遇主任 荒地光泰】



『夢を描け』

若きと老いたるとを問わず
兄弟よ、夢を描け、
蜃気楼よりも大なる夢を。
夢はあなたの肉体を超えて虚空にひろがり
ひろくひろく宇宙にひろがる雲となって、
あなたをより高き世界へ
あま翔けらす大なる翼となるだろう。

この翼こそ世にも奇しき翼である。
夢の奇しき翼に乗るとき
若きものは向上し
老いたるものは若返る。

兄弟よ、
夢の翼を休めるな、
自己を出来るだけ偉大であると想像せよ。
あまり高く翔けのぼることを恐れるな、
躊躇するな、
尻込みするな、
自分自身を限るな。
あなたは夢の翼によって肉体の制限を超える。
たといあなたが地球にわいた黴よりもその肉体が
小さくとも、
あなたの心は夢を描くことによって
天地を造った偉大なる心と一つになるのだ。

兄弟よ、
悲しみに打たれるな。
打たれても起き上れ。
描いた夢が破れても
あなたはまだ夢を描く自由はあるのだ。
自分にまだ偉大な力が残っていると想像せよ。
夢を描くものにとっては
此の世界は常に新天新地である。

(谷口雅春著『生命の実相』第20巻「聖詩篇」P189～P190より抜粋)

新任職員の小唄一弘です。出身は神奈川県です。私は小学校、中学校、高校と多くの人と仲良くなるという生活ではなく、どちらかと言うと2、3人の仲の良い友達と遊ぶ事が多かったです。その為自分の性格を表に出すのではなく、内向的で見知っている人にしか自分を出せない性格になってしまいました。このような自分が児童養護施設を目指すことになった理由は大学生の時のある理由が発端にあります。

大学三年生の時に横浜にある不登校児を専門に扱い学校に復帰できるまで支援を行うという目的の施設でボランティアをしました。その時に仲良くなった子どもの中に児童養護施設から来ている子供がいて、何気ない会話の中で、今いる施設で大変なところや楽しい所を話してくれました。「今不登校になっているのは自分の近くに味方が全くいないからだ」という事を打ち明けてもらい、私でも誰かの役に立つことが出来ると感じ、将来児童養護施設に就職するという考えが浮かび始めました。そして、その思いを確かなものにしたのが、昨年横浜の児童相談所でアルバイトしている時の事です。当時その場所で私ととても良い関係を築いていた双子の兄弟が居ました。両者とも僕に悩みを打ち明け、今までどのような生活を送っていたのかを話してくれました。

私は6月から入職し、幼児のみのユニットに配属され現在も過ごしています。今はそのユニットの上司である二人の女性や他ホームの方や専門職の方から叱咤激励されながら、刺激的で退屈しない毎日を過ごしています。入って間もない頃は、ユニット内の仕事や幼稚園の準備などを覚えるのに、いっぱいいっぱいでしたが、最近は子どもたちに発見や、一人一人のこだわりなどが見られ、時には笑い、時には怒り怒られながら楽しく過ごしています。このユニットに配属になって一番に感じたことは、子どもは自分を映す鏡であるという事です。自分が穏やかな時、子どもたちは穏やかに過ごしていますが、自分の気持ちがイライラしたり悲しくなっていたりすると、子供たちもそれにつられ悲しい顔をしていたりすぐにイライラしたりしています。なので、最近は子どもたちと接するときは心を穏やかにして、子ども達が日々安心して生活できるようにしていこうと思っています。

私はこの職場に就職できて幸せだと思っています。それは、子ども達を通して様々なことを発見し、体験できるからです。子ども達と一緒に生活できる1日1日を大切に、子どもたちがより充実した生活を送れるように支援していきたいと思っています。

小唄 一弘
kazuhiro koakutsu



We are freshers !!
24年度の**新入職員**
5名をご紹介します



似顔絵は子ども達が
描いてくれました☆

新任職員の須田晋太郎です。3歳まで埼玉県で育ち、4歳からは千葉県で育ちました。家族は父、母、妹の4人家族です。出かける事が大好きな家族なので、よくドライブに行ったり、現在でも月に一回は家族と顔を合わせ、繋がりを大切にしています。趣味は読書とライブに行くことです。カフェでゆっくりと好きな本を読んで過ごす時間が好きで、気分転換になっています。また好きなアーティストのライブに行き騒ぐことも好きです。

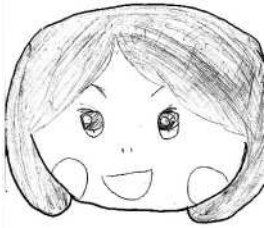
私は中学生時代に行った保育園ボランティアに参加したことがきっかけで、当初は保育士を目指していました。高校生時代でも志は変わりませんでした。子どもの現状をリサーチしていく中で「虐待」という言葉をよく見かけ、意識するようになりました。子どもたちの心の傷を癒したり、抱える悩みを聞いたり等、心のケアを行っていきたくと考え、大学は心理学の勉強をしました。心理の勉強を行っていく中、大学三年生時に行った実習で初めて神の国寮の子どもたちと出会いました。当初は「子どもたちと話せるかな」「どんな子どもたちがいるのかな」と不安でいっぱいでした。しかし長期に渡って行った実習の中で、多くの経験を得られることができました。数か月間の実習でしたが、子どもたちの成長を側で感じる事が出来、大人としても成長することのできる素晴らしい仕事であると感じました。実習後も子どもたちが私の名前を覚えてくれたり、大学四年生時から始めた神の国寮でのアルバイトを行っていた期間でも、実習時同様に子どもたちの成長を間近で感じる事が出来たことを、今でも鮮明に覚えています。実習・アルバイトを通じて、児童養護施設での職務にやりがいを感じ、働くことを決めました。

4月より入職し、男子ブロックで二か月間過ごした後、女子高齢児、男子低年齢児の混合ユニットへの配属となりました。新ユニットに配属後は毎日がとても刺激的でしたが、その反面、悩んでばかりの毎日を過ごしていました。私が伝えたい想いが子どもに上手く伝わらず、「私は子どもたちに何をしてあげられるのだろうか」と塞ぎ込んでいた時期もありました。しかし私の暗い表情を察知したのか、逆に子どもたちから「お兄さん何かあったの?」「元気ないけど大丈夫?」と優しく声を掛けられ、少し心の重荷が取れ、前向きな姿勢を取り戻すこともありました。様々なトラブルもありますが、子どもたちからの一声にたくさん助けられたこともあり、心の支えになることもありました。また子どもたちからだけではなく多くの先輩にも助けられました。お会いする度に「大丈夫?」「何かあったらいつでも言えよ?」と声をかけてくださり、私の中でとても大きな存在となっています。同時にそんな先輩に囲まれながら仕事を行うことのできる環境にいる私は幸せ者だと感じています。これからも多くの壁に当たることもあるかと思いますが、強い信念を持ち職務を全うしたいと思います。



須田 晋太郎
shintaro suda

盛愛 megumi mori



昨年の四月に入職して、早いもので九ヶ月が経とうとしています。慣れないことばかりの日々から、日が経つごとに環境にも慣れ、充実した日々を送っています。

私は幼い頃から子どもが好きで、小学生の頃から保育士になるのが夢でした。高校に入ってからは、地域の保育園でボランティアをしていました。その頃から、保育園

やテレビのニュースで「虐待」という言葉をよく耳にするようになり、「この子達に何か出来ることはないか、助けたい」という気持ちを抱くようになりました。そして高校卒業と同時に、ボランティアをしていた保育園でアルバイトとして採用して頂き、夜間の保育科の専門学校に入学しました。入学してからは、特に児童養護の分野に興味を持ち、施設実習を通して実際に子ども達と関わる中で、胸が熱くなるような出来事もあり、「この子達の抱えているものを少しでも取り除く力になりたい、支えになりたい」と強く思い、児童養護施設の職員になる道を決意しました。

現在私は男女混合のグループホームで勤務させて頂いています。高校生の女の子一人と、中学生の男の子一人、そしてやんちゃ盛りの小学生四人が生活しているホームです。日々色々な衝突や葛藤があり、自分の対応に悩むことも多々あります。けれどそれだけではなく、子どもと一緒に笑い転げたり、喜びを分かち合ったり、辛さに勝る出来事があります。子ども達の笑顔や成長を見る度に、もっと頑張ろう、もっと向き合っていこうという気持ちが湧き上がります。様々な背景があり、様々なことを抱えている子ども達、日々の生活の中で少しでも心の傷が癒えるよう、子ども達に寄り添いながら、愛情いっぱいに接していきたいと思います。そして子ども達と共に成長していける様、日々の処遇に努めていきたいと思っています。

茅場 雄三 yuzo kayaba



茨城県出身の22歳、新任職員
の茅場雄三です。新人職員の紹介
ということなのですが・・・何を
書けばいいのやら。好きな事は人と
話をすることと身体を動かすこと
です。中学生の頃からテニスと陸上を
始め、学生時代はスポーツに打ち込
みました。そこで得た人間関係を武
器に人と話すことが大好きになりま
した。初対面の人も臆せず話すこ
とが出来、積極的にふざけるのが得
意です（時間と場所はわきまえますが・・・）。

しっかりと、自分の紹介をしたいと思います。私は保育士を志望し、東京の短期大学へと入学しました。そのまま卒業し、1年間は非常勤として公立幼稚園で働きました。1年が経ち「何か違う」と感じ始め、今年度から元々興味があった児童養護施設で働くことになりました。

働きたいと思った理由は単純で、「子どもが好きだから」「福祉の仕事に興味があったから」「楽しそうな仕事だから」という分かりやす過ぎるものでした。実際に児童養護の世界に入り込み、様々な実態に触れ、今ではあの頃の気持ちとは違う感情が生まれてきました。それは「素晴らしい仕事だ」「やりがいがある仕事だ」「自分も共に成長できる仕事だ」ということです。毎日毎日、子ども達と触れ合い、喜怒哀楽を共にし、一緒に笑い、一緒に泣く。そしてまた笑う。心から幸せでやりがいのある仕事だと感じています。

現在はGH樺の家（高齢児男子）に配属となり、頼もしい先輩方の中、若手の新しい風を吹き込みながら我ながら頑張っています（特に料理とか料理とか料理とか）。これからも必死で楽しく、ふざけすぎないように子ども達とより良い関係を作り、子ども達の思い出になれるような格好良い茅場お兄さんとして、一生懸命楽しんで処遇に励みたいと思います。

岩下恵梨、栃木県出身です。高校まで栃木の田舎で、のんびりゆっくり、父、母、祖母、兄、弟2人で暮らしていました。4人兄弟の2番目で、周りが全員男の子なので、小さい頃はよく兄のお下がりを着させられたり、口が悪かったりと、女の子らしくないと言われたりしていました。趣味は旅行とライブで、友達と何も考えずに騒いだりすることが好きです。

高校の実習で「保育の勉強もしてみたい」と思ったのがきっかけで、保育士と社会福祉士の資格が取れる大学を選択しました。大学の
実習で自立援助ホームや児童養護施設に行き、子ども達との関わりを通して、親の下で生活できなくなってしまった子どもの葛藤や、18歳になった子どもが不安を抱えながら進学や就労を考えたりすることが、私には想像することのできないものでありましたが、少しでも力になれないかと考え始めました。私にはその子の人生を変えたり、大きな影響を与えることは出来ないかもしれない、しかし私の感じる想いを伝えることは出来るのではないかと考え、児童養護施設で働きたいと思い、現在に至ります。

実際に働き始めてからは、普通の生活では体験しないような出来事もあり「もうヤダ」と考えたり、「何でそんな事するんだろう、私の思いは伝わらないんだな」と腹が立ったり、投げやりになったり、心をかき乱されたりしました。しかし過ぎてしまえば「あんなこともあったな…まったく」と考えられる状況にもなり、素直に甘えてきたり、私の思いに理解を示してくれた時は、もう少し頑張れそうだなと感じたりします。

私は、子どもたちに想いを伝えていける職員になりたいです。「バカでもいいから周りの人を大切にしたい」と思っています。勉強が出来なくても、周りの人を大切にできる心を持っていれば、その子の周りにはいつも助けてくれる存在が近くにいるのではないかと、思うからです。その中で、人を気遣う思いやりだとか、自分の行動が相手にどんな影響を与えてしまうのか、そういったことを考えられる人間になって欲しいです。その為に私は、子どもたちとの関わりで感じる想いを伝えたり、子どもの気持ちを代弁しながら、他者を思いやれるような心を育てていきたいです。

岩下 恵梨 eri iwashita



生長の家神の国寮では自立支援の一環として、子どもたちの心に大きな夢を与え、国家・社会に貢献する「志」を立てる教育をめざしています。

創設者・谷口雅春先生は「人間はすべて五つの根本的願いをもっているのである」として、次のように説かれています。

「認められたい、愛されたい、称められたい、自分の存在が誰かのお役に立っている自覚を得たい。そして最後に、自由になりたい」という五つの願いである。子供が善いことを少しでもした時には、それを認めて大いに称め、愛してあげて満足させてあげるがよい。その称める理由に、「あなたの行為がこのように人のために、或は国のために、或は家族のために役に立っているから善い行いだ」というふうに話してあげて、「誰かの役に立ちたい」という希望を満足させてあげるのがよい。そのような教育を施すとき、公のために尽くすことの喜びを実感をもって知るようになるのである。▽

平成24年3月、NPO法人「まほろば教育事業団」（会長・中西輝政京都大学教授）が企画する『東日本大震災被災地ボランティア（宮城県石巻市・亘理町）』の『中高生が考える「日本の誇りと絆」の

Series report ●【連載記事】②

生長の家神の国寮における 日本的養護・養育の実践

文＝国弘昭義 副施設長
text:akiyoshi kunihiro

集い』に、生長の家神の国寮の中学生・高校生有志8名と引率職員2名が参加して、東日本大震災被災地のボランティア活動を行いました。その時、実感したことは、参加した子どもたちが自分がこれまで経験したこともないほど、被災地域の人々から歓迎され、喜ばれ、讃嘆されたことよって、自信をつけたのではないかということとです。

ボランティアを終えた夜、他県から参加した高校生たちとの交流会で、日頃人前で発言することが

苦手な児童も、自分の言葉で堂々と感想を述べていました。さらに、仮設住宅に住んでいる高齢者の方々と一緒に昼食を摂りながら、被災した当時の話を聞く時も「あんたらよく来てくれたね！有り難いねえ！有り難いねえ！」とおばあちゃんたちから褒められた時の児童の顔は、寮内ではめつたに見られない喜びに輝いていました。

「自分の存在が誰かのお役に立っている」という人間の根本的な願いを満足することこそ、これからの子どもたちの自立にむけた支援の新しい形であり、支援を受けることから、誰かのために、社会のために、国家のために「役に立っている」という経験を積むことが大切な視点であると実感しています。

以下、活動の報告と参加児童の感想文を掲載します。

◆「私は清掃をしている最中に、おそらく現地の方が使用されていたであろう二



つの皿を発見しました。その二つの皿は同じデザインだったので、家族で使用していたものではないかと思えます。津波は家族の団らんまで奪い去ってしまったのか、と感じ、津波による被害の

大きさというものを身をもって感じました。それと同時に、その場にいる大勢のボランティアの方々の姿を目にし、日本人が本来持っている助け合いの精神とはこのことを指すのだと感じ、日本人としての誇りと自覚が更に強まったように感じました。」（高校三年 あらたくん）

◆「がれき撤去の中でも特に陶器などが危なかったもので、重点的に拾った。東北の人はやさしかった。震災がおこってから団結心が高まり、全ての物事に感謝する気持ちが強まった。・・・被害を受ける場所は当時にながったのか一切分からなくなっていた。ホントに人が住んでいたのかな？と思うほどだった。でも丁寧にかたづけられた。見るのも勉強だと思った。車が走っているときに外の景色を見ると、あるのはただ一面のがれき。なんとも殺風景。でも現実を見なきゃと思った。」（高校一年 あまねくん）

◆「十時間ぐらいかかって行きました。寒くて雪が降っていました。ビデオで津波を見ました。車や家や船までも流され驚きました。津波の恐さを知りました。さむくて手がちぎれそうでした。でもおれなりにがんばった。まわりの人は、みんなやさしく声をかけてくれました。やさしい人ばかりでした。」（高校一年 こうくん）

◆「早朝から門脇小学校や日和山に行き、黙禱を捧げ、それからボランティアをしました。がれきやゴミを拾っていて感じた事は思い出のある物も流されてしまっていて大切な物にも目をやる事が出来ず、自分が生き残ることで精一杯だったのだということです。」（中学三年 やとくん）

◆「寒い中がれきそうじをしました。さむくて手が凍りそうでしたががんばりました。みんなあたたかく声をかけてくれました。つくづく津波・地震はこわいと思いました。いろんな事を学びたい経験をしました。」（中学二年 ゆうきくん）

◆「寒い中そうじをしました。いっしょうけんめいそうじをしました。寒くて手がマヒしました。でもいっしょうけんめいしたよ。みんなやさしく声をかけてくれました。うれしかったですよ。俺もこれからがんばるからみんながんばれ！」（中学三年ともゆきくん）





随想 ● 松本光彰
GH統括主任

「子どもに寄り添う」とは



栄養士として勤務していた私が、子ども達に直接関わるケアワーカーとして働くことになったのは今から10年前の事でした。

当時の神の国寮はベテランと言われていた職員が次々と退職し、愛着の対象となる大人が居なくなることによる子ども達の施設内・施設外の問題行動が多発していました。時には警察の助けを借りなければ対応できない事例も次々と起こり、問題行動を繰り返す児童に対応する新人職員は、精神的にも肉体的にも疲弊し退職を余儀なくされ、職員のめまぐるしい入れ替えが常態化し、子ども達の問題行動は深刻な度合いを増すばかりでした。給食栄養士という間接的な立場から子どもとケアワーカーの関係を見ていた私は、子ども達が落ち着かず、問題行動ばかりを繰り返すことの解決の糸口として、“職員の腰を据えたケアによる子どもとの信頼回復を図る”事に重点を置き、子どもから信頼される職員のあるべき姿とは何か？という事を念頭に置きながら子ども達に接していくことを心掛けていました。

当時の子ども達の問題行動に対しての対応を例に挙げると、集団で授業を抜け出し学校施設内の木や建物屋根によじ登り授業をボイコットする子ども達に、授業を受けるよう根気強く説得したり、ある時は集団で万引きを行った店に、万引きを行った子ども達を引きつれ謝罪に行ったり、又ある時は子ども同士のトラブルで暴れまわる子どもを怪我の無いよう押さえ込んだりと、子ども達の問題行動に対し、逃げず・ひるまず、真正面から受け止めていく姿勢で継続的に働きかけを行ってきました。体力的・精神的な強さを自負していた私ですが、数年後にはストレスが原因と思われる結石（尿管結石）を患い、改めて施設業務の過酷さを実感した後は、肩の力を抜き自身の健康状態も考慮しながら自然体で、子ども達に接していくことを心掛けました。

現在の施設の状況は、8〜10年目のキャリアの職員等がケアの継続の重要性を十分に理解し、子ども達の問題行動を真摯に受け止め、子どもに寄り添うケアが継続的に成された結果、子ども達も落ち着きを取り戻し、施設の状態も安定期を迎えるようになりました。昨年7月に本体施設も立て替えを行い、大舎制の生活空間から小舎制（小グループ）の生活空間への変更が成され、子ども達の生活環境も変化し生活環境起因の問題は改善されました。

私達神の国寮職員が継続的発展を図る上で必要な観点は、初心に立ち返り“子どもとの信頼関係作り”を中心にケアがなされることが、継続的に行われることであり“子どもに寄り添うとは何か？”ということを自問自答していく謙虚な姿勢が大切であると考えています。

◆「学校はホントに衝撃を受けた。津波の被害を受ける前と後の写真で、ほとんど押し流されているのが分かった。もしも自分の家が流されたらもうどうしようか。まんがやゲームや机、今までお金を使って集めてきたものが一瞬で水の泡になることを想像するとホントに胸が痛くなった。全てを失って、それでも必死に復興していこうと前向きに考え行動している地元の人々を見て、自分も頑張らないと、と思った。」
（高校一年 あまねくん）

◆「ハーモニカの鈴木さんは優しくかった。食堂の食べ物がおいしかった。みんな優しくかった。これからは自分も他の人には優しくしようと思いました。」
（高校一年 こうきくん）



児童の自立支援のための募金のお願い

～児童の自立支援のための「サポート・ペアレント」になってください！～



大学や専門学校に進学する子どもの生活をサポートするために、毎月一定額を支援して下さる方が「サポート・ペアレント」です。一口3,000円（月額）から「サポート・ペアレント」に登録して頂けます。毎年、支援を受ける子どもからサポート・ペアレントの皆様にお礼の近況報告をさせていただきます。

募金の申し込み方法

- ・ 振込用紙に必要な事項をご記入の上、郵便局にてお払い込みください
- ・ 事務局にてご入金を確認した後、受納証・季刊『神の国便り』をご送付させていただきます
- ・ 直接、当施設にご持参いただいても結構です

- (1) 郵便局を利用される方・・・口座番号 00190-7-599648 児童養護施設生長の家神の国寮
- (2) 銀行を利用される方・・・ゆうちょ銀行 店番019 当座 0599648

【平成24年10月から12月迄に寄付金・寄贈を下された方々】
(順不同・敬称略)

〈寄付金〉 城下早苗／岡野陽子／高安美佐子／田中坤江／石塚陽一／井嶋栄治／横田基地／新井ゆみ

〈寄贈〉 タイガーマスク基金／セカンド・ハーベスト・ジャパン／株式会社東和キャスト 代表 朝日徹太郎／星よし子／黒木フエ子／谷口貴康／岡村利子／全国シャンメリー協同組合／安濃主税／白井章子／ナショナル物産株式会社 ナショナル田園店長 高橋淳則／株式会社チュチュアンナ／株式会社三菱東京UFJ銀行／山崎正之／株式会社メリーチョコレートカンパニー／田中亮子／日本鏡餅組合 理事長 樋口元剛／公益財団法人毎日新聞東京社会事業団／吉野和之／ほっともっと／一般社団法人東京馬主協会／第一生命株式会社 立川支店 西国分寺営業オフィス／大久保医院 新井ゆみ／モンテ物産株式会社 東京支店広域業務グループ／岡田真紀子／市川／株式会社ニトリホールディングス 社長 似鳥昭雄

〈サポートペアレント〉 宮原妙子／岡本初枝／佐々木邦枝／大原和子／北浦徳章

Close
UP

【 WEBサイトのご紹介 】
神の国寮のホームページはご存知ですか？

大切なものがあるから、
わたしたちは変わり 続けたい

神の国寮のホームページでは、施設概要や第三者評価結果等、様々なコンテンツを公開しています。専門職のコーナーでは月に一度、4名の心理職が交代でエッセイを書いています。寮内の出来事から「うつ」のお話まで、心理職ならではの柔らかい語り口で綴られています。どうぞご覧ください。

アドレス <http://www.kamino92.or.jp/>



寒い日が続いておりますが、時折射す日差しに温もりを感じられる時期になって参りました。神の国寮の子ども一人ひとりが明るく希望にあふれた、新年度に向かって進級・進学・社会への旅立ちを迎えるため、日々一生懸命生きております。職員一同も子どもたちに寄り添いながら、共に生長していきたいと感じています。(村木)